

二席 沖縄県文化振興会理事長賞

踊離ヶ島炭坑綺譚

仲島 剛弘

〈あらすじ〉

昭和十年頃。沖縄県八重山郡の踊離ヶ島では、二人の男を中心に石炭採掘が行われていた。一人は県出身の大嵩恒蔵、もう一人は本土出身の片桐純吉である。

炭坑には高収入をあてにして、県外の者も多く流れ込んで来ていた。本土から来た坑夫たちの中には、地元沖縄の者を蔑み、馬鹿にする者も

いた。片桐は沖縄の坑夫を琉球人と呼び、特に過酷な扱いをしていた。

片桐炭坑から逃亡した坑夫を何度も助けていたのが大嵩恒蔵である。恒蔵は、坑夫たちは家族も同然だという考えをもって、自分の理想郷の実現を夢見ていた。

そんな中、思いを残して恒蔵が死す。那覇から恒蔵の弟恒勝がやって来る。恒蔵亡き後、長男の恒市郎が炭鉱経営全般を、次男の恒次郎が五・六・七坑の採炭責任者となる。

片桐は恒蔵が死んだのをきっかけに、大嵩側の兄弟炭坑を次々に奪っていく。恒次郎は、奪われた炭坑を取り返すために、博打で勝負を仕掛けるが、負けてしまう。

片桐炭坑から二人の男が逃亡する。山奥に逃れ、炭坑から離れた場所で山を下りようとするが、どこも片桐の追っ手がいる。二人は大嵩炭坑

に救いを求める。

片桐は、大嵩炭坑に逃げ込んだ逃亡者を取り返すために、大挙して押し寄せる。両炭坑夫たちの大乱闘となる。乱闘の最中恒市郎は、弟の恒次郎を庇って傷を負う。その時に、恒市郎が実は片桐純吉の子どもであることが分かる。片桐は大嵩炭坑側の全てを奪おうとするが、恒市郎は大嵩恒蔵の夢を引き継ぐことを宣言。

『美田良浜夜曲』の歌声が鳴り響く。

〈登場人物〉

大嵩恒蔵(56) ……大嵩炭坑親方

すゑ(54) ……その妻

恒市郎(34) ……恒蔵の長男

恒次郎(25) ……恒蔵の次男

長浜美千代(29) ……恒蔵の娘

大嵩恒勝(53) ……大嵩恒蔵の弟

岸本(43) ……大嵩炭坑の納屋頭

当銘(40) ……大嵩炭坑の納屋頭

山口(44) ……大嵩炭坑の納屋頭

奥原(43) ……大嵩炭坑の人事係

吉元(52) ……大嵩炭坑の医師

齋藤 (30) ……大嵩炭坑夫
富樫 (29) ……大嵩炭坑夫
村上 肇 (40) ……大嵩炭坑夫
 義男 (18) ……その息子
原田富雄 (35) ……大嵩炭坑夫
 亜紀 (28) ……その妻
片桐純吉 (55) ……片桐炭坑親方
藤野 (41) ……片桐炭坑の納屋頭
熊谷 (42) ……片桐炭坑の人事係
平良 (30) ……片桐炭坑夫
宮城 (40) ……片桐炭坑夫

安里(38) ……片桐炭坑夫

知花(41) ……祖慶部落の漁師
坑夫及び部落の人々多数

1 踊離ヶ島〜大嵩炭坑村全景

【ナレーション】

沖縄県八重山郡の踊離ヶ島は、早くから石炭埋蔵地として知られていた。当初、石炭採掘は国策に基づき、時の政府の御用資本によって行われていた。しかし、明治期の三十年代半ばになると、政府直営の採炭事業から、県内事業者及び日本本土の中小資本による事業経営に移っていった。

物語は、石炭需要が活況を呈していた時代を背景に、県出身の炭鉱事業者へ大嵩恒蔵と本土出身の炭鉱事業者へ片桐純吉が、盛んに採炭していた頃の話である。

2 大嵩炭坑第一坑口（第七坑口（昭和十年夏））

大嵩炭坑第一坑口。入り口に、人繰りが立っている。

午後四時。炭坑村の矢倉から、ひと際高い鐘の音が鳴り響く。しばらく間を置いて、上半身裸の男たちが、汚れた顔をしてゾロゾロ出てくる。ツルハシ、スラ箱、シャベル、カンテラなどを手にしている。

人繰り「おい、運炭係の新垣、ちよつと待て」

新垣「：はい、何か？」

人繰り「今日は定例の座談会がある。八時に集会所に集まれ！」

新垣「分かりました」

新垣、向こうへ行く。別の男に声をかける

人繰り。

人繰り「橋本！」

橋本「（疲れた顔）…はい」

人繰り「今日八時から座談会がある。集会所に集まれ！」

橋本「分かりました」

各坑の入り口で、人繰りが男たちに声をかけている。

3 大嵩炭坑村・集会所・中（夜）

四十名余の坑夫が集まっている。大嵩恒蔵とその息子二人が入ってくる。恒蔵を真ん中にして一座の前に座る。皆のおしゃべりが止む。

恒市郎「皆さん、お疲れのところご苦労様です。今日は定例の座談会です。各坑での仕事の様子、納屋での生活のことなど、どんな

ことでもいいですから、この場で出してもらいたいと思います」

座談会は恒市郎の司会で進行する。

恒市郎「この場には納屋頭を始め坑内係、仕操係、運炭係、それに吉元先生と売店長も来ています。それぞれの持ち場で何か気づいたり、困っていることがあったら遠慮なく出してください」

一人の男が発言する。

金城《仕操係》「この間、三坑で天井が崩れて危ない目に遭った者がいます。幸いにボタが落ちてくる気配に気づいて大事には至らなかったのですが。炭層が濃い所は無理してでも掘ろうとするので、こういうことが起きてしまいます」

吉元「その男は、わしの所で手当をした。軽い打撲で済んだ」

当銘《納屋頭》「うちの納屋に脚気気味の者がいます。先生に診てもらっ

ていますが……」

吉元「脚気は栄養状態が悪い時に罹る。それと、休みの日には太陽の光を十分に浴びることだ。陽の射さない坑内に長時間いると、ビタミンB1とビタミンDが不足してくる」

売店長「皆さんの健康については、食事面でも気を配っているつもり

です。医局の先生方と相談して、栄養のある献立を出しています」

新垣《運炭係》「坑夫の体力にはそれぞれ個人差があります。体力に応

じて先山、後山と仕事を分担すればいい」

恒市郎「健康保険もあるので、治療代は心配ない」

岸本《納屋頭》「(言いにくそうに) ……うちの納屋で喧嘩があったの

だが……」

恒蔵、ジロリと岸本を見る。

恒蔵「ほう……喧嘩があったのか」

岸本「一昨日のことですが、赤嶺という者と村上という奴が……」

恒蔵「原因は何だ？酒か？」

岸本「いいえ」

恒蔵「じゃあ、何だ？」

岸本「村上の言った言葉がきっかけです」

恒蔵「何と言ったのだ？」

岸本「『琉球生蕃！』と言って赤嶺を馬鹿にしたのです」

恒蔵「(眉根が動く) 琉球生蕃だと？」

静まる一座。

恒蔵「(声に力がある) みんな、聞いてくれ！」

皆の視線、恒蔵に集まる。

恒蔵「いいか、わしのこの大嵩炭坑には、坑夫とその家族、他の従業員も含めると千名余の者がいる。わしは若い頃から自らも坑夫として働き、炭坑の仕事がどんなものかも知り尽くしている。だからこそわしはここに診療所もつくった、公会堂もつくった、売店もつくった。坑夫たちはわしの財産だと思っから、難儀な仕事も少しでも楽しく、安心してできるように考えているのだ。もう一度言う、坑夫たちはわしの財産だ！その財産の中には内地者も沖繩者も台湾人もいる。だがわしにとっては、みんな同じ人間であり、同じ財産だ！」

語気を強める恒蔵。

恒蔵「わしは、この長倉に理想郷をつくりたいのだ。今の世の中どこも不景気で、満足に飯も食えず、家族も養っていけない。だから

沖繩本島からも内地からも、この踊離ヶ島にやって来るのだ。食うに困らず、家族と安心して暮らせる、そういう理想の世界をわしはつくりたいのだ。大嵩炭坑の者はみんな家族も同然だ。わしは誰が内地の人間、誰が沖繩とか台湾だとか、そんなちやちな考えは持っていない。家族が家族を蔑み、差別的なことを言うのは、このわしが許さん！」

ほとぼしるような恒蔵の思い。

恒蔵「岸本、その村上とかいう男を後でわしの所へ行かせてくれ。みんな分かったな！各坑ともお前たちの方から、わしが言ったことを伝えてくれ」

坑夫たち「分かりました！」

声を和して応える男たち。

恒蔵「(恒市郎に顔を向け) 恒市郎、うちは今どのぐらいの割合だ、内地と沖縄の者の割合は？」

恒市郎「うちは沖縄の者が四割、内地者が四割、台湾人が二割ぐらいです」

恒蔵「そうか」

恒市郎「隣の片桐の所は内地者が五割、残りが沖縄と台湾です」

二人の間に当銘が言葉を挟む。

当銘「片桐といえば親方…」

恒蔵「(当銘を見て) ふむ」

当銘「片桐の所から逃亡者が出たそうです」

恒蔵「ふむ、いつだ？」

当銘「昨日です。平良という者です」

恒市郎「親方、どうしましょう？」

恒蔵「どうしましょうとは、どういうことだ？」

恒市郎「もし、うちの界限で見つけたらどうしますか？片桐に連絡しますか？」

恒蔵「馬鹿野郎！片桐の前にまずわしに知らせろ！わしの所に来た者

はわしが考える」

荒っぽい口調だが、俠気に富む恒蔵の言葉。

……炭坑村の時鐘が鳴る。

恒市郎「今日はこれで終わります。明日から船積みがあります。手配

したとおりに抜かりなくお願いします。では解散！」

× × ×

皆が集会所を出た後、恒次郎が恒市郎を呼び止める。

恒次郎 「兄貴」

恒市郎 「何だ？」

恒次郎 「片桐の所から逃亡した者、見つけたら片桐に連絡しないのか？」

恒市郎 「さっきの話聞いていなかったのか？まず親父に知らせるんだ」

恒次郎 「親父はまた逃がしてやろうとするだろう。そうすると片桐も

黙っていないと思うが……」

恒市郎 「それは親父も考えている。とにかく親父の言うとおりにする

んだ」

恒次郎 「(不満げに) 兄貴は親父のことをどう思っている？」

恒市郎 「何？」

恒次郎 「理想の世界をつくるという話も兄貴はどう思う？誰が内地者

とか沖繩者とか台湾人とか、そんなちやちな考えはないと言う

が、しかし現実とは違うんだ。内地者の中には、沖縄人は日本人じゃないと言って馬鹿にする者も実際にいるんだ！」

恒市郎 「親父はそういう現実もちゃんと見ている。親父は単なる理想家ではない。そこはお前も分かっているだろう」

恒次郎 「分からんね」

苛立ちを隠そうとしない恒次郎。

恒次郎 「親父は昔からそうだ。兄貴に何もかも話して俺には何も言ってくれない。親父の理想も俺は直接聞いたことはない。兄貴はあるだろうが……」

恒市郎 「何が言いたいのだ、恒次郎？」

恒次郎 「(猜疑の目で) 俺は親父の子どもではないからな——」

恒市郎 「何？」

恒次郎「分かっているんだ、俺は親父の本当の子どもではないことを」

恒市郎「馬鹿野郎、くだらんことを言うな！急に何を言っているんだ！」

恒市郎をちらと見遣って、集会所を出て行く恒次郎。

恒市郎「恒次郎！」

恒次郎の後ろ姿を、硬い表情で見送る恒市郎。

4 長倉港の栈橋（早朝）

長倉部落の港湾から沖に向かって細長い栈橋が延びている。栈橋にダルマ船が十隻。沖に碇泊している積み取り本船。港の貯炭場と鉱山の間にはトロッコのレールが走っている。石炭の山に突き刺さるシャベルの音。男たちの大声が響く。

恒市郎「急ぐんだ、みんな！今回は千三百トン積み込むんだ！」

大きな鉄製の漏斗が、船積み場に設置されている。漏斗の下にダルマ船を入れ、石炭をバケツトに落とし込む。曳舟に引かれて沖の本船に向かうダルマ船。

× × ×

恒市郎が指示をしているところに、岸本が近寄ってくる。

岸本「恒市郎さん、親方が呼んでいます」

恒市郎「親方が？」

岸本「事務所に来るようにとのことです」

恒市郎「分かった。岸本、後は頼むぞ！」

岸本「はい」

事務所へ向かう恒市郎。

5 大嵩炭坑事務所・中（朝）

恒蔵親方、恒次郎が椅子に座っている。部落の新本（漁師）が平良（片桐炭坑逃亡者）の側にいる。恒市郎が入ってくる。

恒市郎「親方」

恒蔵「おう、恒市郎」

恒市郎「どうしたのですか？」

恒蔵「こいつが片桐炭坑から逃げた者だ。新本の所にいたのを、今しがた連れてきたのだ」

新本が恒蔵の話の後を継ぐ。

新本「今朝、漁に出ようとして道具を取りに小屋に入ったら、そこに隠れていたのです」

痩せこけた身体の逃亡者。怯えた表情をしている。

恒蔵「安心しろ、お前に危害を加えようとは思っていない。だがお前、

なぜ片桐の所を逃げ出したのか？」

平良「(少し落ち着いて) あそこでは、とてもやっていけません」

恒蔵「どうしてだ？」

平良「片桐は自分たち沖繩の人間に酷い扱いをします。危険な切羽に

は必ず沖繩の者を割り当てて、どんなに疲れていても何十時間も

こき使われます。それに……」

平良、話を止める。

恒市郎「(先を促すように) 何だ？ どうしたんだ？」

平良「片桐は自分らにモルヒネを打ちます」

周りにいた当銘、新本が「モルヒネを！」と一様に声を上げる。

平良「疲れをとるといふ名目で、無理やり打たされています」

恒蔵「あこぎなことをしやがる……」

平良「お願いです！片桐に引き渡さないでください。向こうには戻り

たくない！」

恒蔵「そうだな……」

恒蔵、少し思案する。

恒蔵「(新本に) お前のサバニで、踊離ヶ島から逃がしてやることはでき
ないか？」

新本「そりゃー、島伝いであればサバニでも垣花島まで行けますが」

恒蔵「わしが金を出すから、こいつを逃がしてやってくれ。祖慶から

ではなく、葦崎の方から迂回して。できるか？」

新本「親方の頼みとあれば、もちろんできます」

恒蔵「(平良を見て) お前、家族はいるのか？」

平良「いいえ、いません」

恒蔵「(恒市郎の方を向いて) 恒市郎、こいつに当座の金を渡してやれ」

恒市郎、平良にお金を手渡す。

平良「(痩せた身体を二つに折り) あっ、ありがとうございます！」

皆、恒蔵の行為を感激の面持ちで見ている。

恒次郎だけは冷めた顔。

6 大嵩炭坑村・集会所・中(夜)

四日後。大勢の坑夫たち。

船積みが終わって慰労会を開いている。

坑夫たちの前に酒、折詰の食事。

恒蔵「みんな、積み込みご苦労だった。みんなのおかげで本船を時間

どおり出港させることができた。心ばかりのものを用意したが、

これで疲れをとって、明日からまた頑張ってくれ」

恒市郎「さあ、みんな飲んでくれ、食べてくれ」

各自、飲食に手を出す。

× × ×

岸本が男を伴って恒蔵の所に来る。

岸本「親方」

恒蔵「おう」

岸本「この男が村上です」

村上、オドオドした物腰で恒蔵の前に座る。

恒蔵「(ジロリと一瞥を与えて) お前の目には、わしら沖縄の人間は生

蕃に見えるようだな、琉球生蕃に！」

村上「(びくついて)……」

恒蔵「お前は、その琉球生蕃の所で働いて飯を食っているんだ。お前が現金収入を得て飯が食えているのは、ここに居るからだ」

村上「……」

恒蔵「わしは恩を着せようなどとは思っていない。だがな、お前も含めてここに居る者みんなにわしは満足な生活をさせてあげたい。毎日飯が食えて家族を養い、辛い仕事も少しでも楽しくやっていたきたいと考えている」

まるで親が子に説き聞かせるかの如き恒蔵の話し方。

恒蔵「お前たちはわしの大切な財産だ。家族も同然だ。お前から内地の人間も、わしら沖縄の人間も同じ人間だ。ちやちな偏見は捨てる！ わしはこの踊離ヶ島にみんなの理想郷をつくりたいのだ。そのた

めには、家族の中で争いがあつてはならぬ。侮辱的な言い方は、お前自身を貶めるだけだ」

次第に恒蔵の情味溢れる言葉にうたれていく村上。

恒蔵「なあ村上、赤嶺に一言詫びを入れて、みんな家族として一緒に協力してやってくれ」

村上「(目を潤ませて)は、はい！申し訳ありませんでした！」
村上、頭を下げる。

恒蔵「岸本、村上にも酒と折りを持たせてやれ」

岸本「(酒、折詰を手にして)村上、これを持って納屋に戻れ。赤嶺には自分の口で言っておくんだぞ！」

村上「は、はい」

村上、出て行く。村上が出て行った後で、

恒蔵「……ところで、あいつはどここの生まれだ？」

岸本「福岡だと聞いております。福岡の炭坑で採め事を起こして、向こうには住めなくなったそうです」

恒蔵「家族はいるのか？」

岸本「福岡にはいるそうですが、逃げるようしてここに来ているので、

家族はどうなっているのか……」

恒蔵「一家離散ということか……かわいそうな奴だ」

恒市郎、その場の雰囲気盛り上げるように声を上げる。

恒市郎「さあみんな、仕切り直しだ！宴はこれからだぞ」

皆、にぎやかに飲んでいゝる。そのうちに一人の男が歌い出した歌（『美田良浜夜曲』）が次第に大きくなっていく。

『Cの字の形の 美田良浜

アラバラ川と くちづけて

ススキが原の 細道を

君待つ宵の わびしさよ』

恒蔵、恒市郎も一緒に歌う。船積みが無事終わったことで、二人とも機嫌が良い。

『白浜祖内 漕ぎ渡る

小舟の影の 二人づれ

夜露にぬれて 浜づたい

ささやきかわす 誰じゃやら』

×

×

×

——恒次郎、奥原に呼ばれて部屋を出て行く。ほどなくして恒次郎が戻ってくる。

恒次郎「親方」

恒蔵「おう」

周囲の者、恒次郎に注目。

恒次郎「この前逃がしてやった平良という男、あいつが片桐に見つかって連れ戻されたそうです」

恒蔵「何、連れ戻された？」

恒次郎「はい」

恒蔵「どうしてだ？わしは新本に頼んで垣花島まで逃がすように言っただけだが」

恒次郎「それが、垣花島に着いたところで片桐の所の藤野が待ち構え

ていて、数名で連れ戻して行ったということですよ」

恒蔵「……」

思案顔の恒蔵。恒市郎、岸本も思案気な様子。

7 片桐炭坑村全景く祖慶部落全景

【ナレーション】

大嵩炭坑村から北東およそ15kmの所に片桐炭坑村がある。坑夫とその家族、千余が生活していた。

片桐炭坑村から麓に向かって下り切ると、目の前に内海が広がる。湾に沿うようにして張り付いている祖慶部落。部落の人々は農業、漁業を生業としていた。

8 片桐炭坑村・夫婦納屋・外（夕方）

祖慶部落の女が行商に来ている。女が背負う籠の中に野菜の束。納屋の表に、坑夫や女たちが出ている。人々の騒めき。

行商の女「野菜は要らんかねー、野菜」

坑夫「おい、その野菜いくらだ？」

行商の女「あい、三束五銭だよ」

坑夫「何、五銭？高い！」

行商の女「これが相場だよ、高くないよ」

坑夫「高い！お前ら生蕃が作った野菜なんか食えるか！」

野菜の入った籠を足蹴にする坑夫。籠の野菜が辺りに散らばる。女の悲鳴。

坑夫「お前ら田舎者が作ったものなど食えるか！」

坑夫、野菜を掻き集めている女に、さらに罵声を浴びせる。同調の罵声を上げる周りの坑夫たち。

9 片桐炭坑事務所・中

奥の方に片桐親方、藤野の姿が見える。手前の方で書類に目を通している熊谷。

祖慶部落の漁師たちが、一斗缶に入れた魚を事務所内に運び込む。

知花《漁師》「注文の魚を持ってきました」

熊谷「ご苦労、そこに置いといてくれ」

缶を下ろす鈍い音。

知花「百斤持ってきました。一斤十五銭ですから、ちょうど十五円になります」

熊谷「そうか。じゃあ炭坑切符で支払いだ」

熊谷、炭坑切符を手渡そうとする。

知花「（受け取らず）親方、炭坑切符ではなく、現金でください」

熊谷「（舌打ちをして）現金は今は無いです。後でまとめて換えてやるから、これを取っておけ！」

知花「俺たちは現金が必要なんです。現金で払ってください」

藤野「（側から）だから後でまとめて換えてやると言っているだろうが！」

威嚇する藤野。漁師たち、自分が持ってきた炭坑切符を藤野の目前に示す。

知花「（昂った声）これまでの代金がこれだけ溜まっている。俺たちは漁で生活しているんだ。現金で払ってくれ！」

騒ぎを聞きつけて、他の男たちも事務所内に入ってくる。

藤野 「馬鹿野郎！俺たちには内地の方からも魚はあるんだ。お前らの

ものは、お前らが買ってってくれと言うから取っているんだ。つべこべ言わずに切符を受け取って帰れ！」

木刀、棍棒を持って漁師たちを追い払う藤野と熊谷。

10 大嵩炭坑事務所・中

部落の漁師が、恒市郎たちと談笑している。

漁師 A 「ところで親方、話を聞きましたか？」

恒市郎 「何だ？」

漁師 A 「片桐事務所と祖慶の知花たちのことです」

一座の者、耳を傾ける。

漁師 A 「この間、片桐事務所に魚を卸したそうですが、今度も現金で払ってもらえなかったそうです」

恒市郎 「現金をもらえない？」

漁師 A 「炭坑切符を渡されたそうです。自分も何回か片桐事務所に卸しましたが、一度も現金で払ってもらったことがないです。自分らにも生活があります。現金で買いたいものもあります。毎回炭坑切符では食っていけません」

奥原 「で、どうなっているんだ今？」

漁師 B 「知花たちは、もう我慢ならんということで、仲間を集めています」

恒蔵 「黙って話を聞いていたが……ひと騒動ありそうだな。祖慶の知花は人数を集めているのか？」

漁師 B 「仲間の漁師四、五十名ほど集めています」

恒蔵 「ふむ、そうか」

漁師 A 「(帰り支度をするが、ふと思い出したように) そうだ、親方、

村上……村上とか言っていたな、確か……」

恒蔵 「何？」

漁師 A 「自分が去年片桐事務所に行った時、たまたまそこに若い男が
いましたが、それが熊谷に殴られていました。その若い男は確か、

村上と呼ばれていましたが……」

恒蔵 「村上？」

漁師 A 「はい、村上といえばここにも同姓の者がいるはずだと思いま
して。今思い出しましたが、去年の十月ぐらいのことです」

恒市郎 「村上ならうちにもいるが、その男は何歳ぐらいだ？」

漁師A 「さあ、いくつだか……二十歳か十代か……かわいそうに、借金がどうの、渡航費がどうのとか、さんざん悪態をつかれて殴られていました」

恒市郎 「渡航費？」

漁師A 「その若いのは、福岡から来ているらしくて……」

漁師たち、事務所を出て行く。

恒市郎 「親方！」

恒蔵 「……」

皆の視線、恒蔵に注がれる。恒蔵、押し黙ったまま。

11 大嵩恒蔵邸宅・外（夜）

小高い丘の上に建つ宏壮な邸宅。

12 同・居間（夜）

くつろいでいる恒蔵とすゑ。恒次郎が入ってくる。

恒次郎「親方」

恒蔵「（恒次郎の方を見て）ここでは親父でいい……何だ？」

恒次郎「那覇の恒勝叔父さんから連絡がありました。積み荷が無事着

いたと——」

恒蔵「そうか。後はあいつの方で輸送するだけだな」

恒次郎「今度のものはどこに送るのですか？」

恒蔵「半分は関西に送ることになっている」

恒蔵と恒次郎にお茶を出すすゑ。恒蔵は手を伸ばすが、恒次郎は飲

まない。

恒次郎「お父さん」

恒蔵「ふむ」

恒次郎「わたしにもそろそろ仕事を任せてください」

恒蔵「……」

恒次郎「恒市郎兄さんは運輸担当として輸送全体の仕事をしています。

わたしにもそういう仕事を任せてください。施設担当でも祭り

担当でもいいです」

恒次郎のいつもと違う態度に戸惑うすゑ。

恒蔵、お茶を一口飲んで、

恒蔵「恒次郎、お前にはいずれ恒市郎と同じように大役を任すつもり

でいる。だからわしの側でこうやっていろいろ勉強させているの

だ。お前も見て分かるように、ここにいる者はみんな一癖も二癖

もある者ばかりだ。もう少し勉強してからでも遅くはない」

恒次郎「だけど恒市郎兄さんはわたしと同じ年齢の時には、もうお父

さんの右腕として働いていたんじゃないですか」

恒蔵「慌てるんじゃない恒次郎、今少し待て」

恒次郎「(不満顔で)……」

炭坑村の時鐘が鳴る。

恒蔵「恒次郎、もう寝ろ、明日も早いぞ」

恒次郎「(声が低い)お父さん」

恒蔵「ふむ」

恒次郎「わたしは誰の子ですか？」

恒蔵「何？」

恒次郎「わたしは本当にお父さんの子どもですか？」

恒蔵「(目に異様な力を込め)馬鹿者！くだらぬことを言うな！お前は

わしの子に決まっとる！」

すゑ 「恒次郎！何てことを！」

恒次郎 「わたしはお父さんの子どもだと思っていました。だけど最近、

妙な話を聞いたのです。わたしの父親は他にいる——と」

すゑ 「誰がそんな馬鹿なことを！お前はお父さんの子です。そんなで

たらめを誰が言ったの！」

恒蔵 「恒次郎、誰がそんなことを！」

昂奮している二人を尻目に、部屋を出て行く恒次郎。呆然としてい

る恒蔵、すゑ。

……恒蔵、苦悶の表情をして胸を押さえる。

恒蔵の苦しげな声。

すゑ 「あなた！どうしました！」

恒蔵「苦しそうに）うむ……む……」

すゑ「吉元先生を呼びますか？」

恒蔵「（少し良くなる）いや、大丈夫だ……呼ばなくていい」

恒蔵、胸を押さえながら隣の部屋に行く。

13 海辺の苦屋・外（夜）

ひっそりとした佇まいの苦屋。恒市郎が姿を現す。確認するように周囲を見回し、中に入る。

14 同・中（夜）

片桐炭坑の熊谷がいる。熊谷、恒市郎に何やら話している。恒市郎の顔色が変わる。

× × ×

——熊谷、出て行く。

放心の態で突っ立っている恒市郎。

15 大嵩炭坑事務所・中

恒蔵、恒次郎、奥原たちがいる。

岸本、飛び込んでくる。

岸本「親方！」

恒蔵「どうした？」

岸本「祖慶の知花たちが、今日片桐の所に押しかけます！」

恒蔵「何、今日？」

岸本「今頃はもう片桐の所へ行っているはずですよ」

恒蔵「奥原、こっちも人数を集めろ！」

奥原「はっ、はい！」

奥原、納屋の方へ走って行く。

恒蔵「恒次郎、トラックを用意しろ！」

恒次郎、外へ出て行く。恒蔵、出口へ向かおうとするが、何事か思いついたらしく足を止めて、

恒蔵「岸本、村上を呼んで来い！あいつも一緒に連れて行くんだ！」

岸本「分かりました！」

岸本、飛び出して行く。

16 トラックの座席

運転している岸本。助手席の恒蔵、後ろの

トラックを振り返って、

恒蔵「恒市郎は、どこだ？」

岸本「探しましたが、どこにも……」

恒蔵「そうか……」

じつと前方を見つめている恒蔵。

17 片桐炭坑事務所・外

祖慶部落の漁師五十名、片桐炭坑の坑夫六十名ほど。知花側（漁師）、片桐側、双方とも木刀、棍棒、角材などを手にして睨み合っている。

知花「片桐、金を払え！」

片桐「琉球人どもが！金は炭坑切符で払っている！」

漁師たち「炭坑切符は要らん！現金で払え！」

藤野「馬鹿野郎！魚はいくらでも内地から入ってくるんだ。お前らに

現金で払う金はない！」

知花「何！俺たちを騙したな！」

熊谷「馬鹿野郎！お前ら琉球人と俺たちとは人種が違うんだ。（人差し

指で自分の頭を指して）頭の中身が違うんだ！」

知花「（憤怒の表情）うぬぬ……」

片桐「野郎ども、こいつらをたたきのめしてやれ！」

片桐の一声で、漁師たちに襲いかかる坑夫集団。双方入り乱れて壮

絶な乱闘。

× × ×

形勢不利になる漁師たち。

——そこへ恒蔵たちのトラックが到着。

恒蔵「（力強く響く声）止めろ！止めろ！」

双方、恒蔵たちが来たのに気づく。

片桐「何だ、大嵩！何の用だ！邪魔するな！」

恒蔵、両者の間に割って入る。

恒蔵「片桐、漁師たちにも生活があるんだ。炭坑切符では村では品物が手に入っても、村以外では買いたい物も買えない。現金で払ってやれ」

片桐「やかましい！元はといえばこいつらが大量に買ってくれと言うから、こっちは買ってあげているんだ。こいつらだって初めは炭坑切符で受け取っていたのだ！」

知花「馬鹿を言え！こっちは最初から現金でと言っているんだ！」

この時、片桐側の坑夫たちの中から、若い男が声を上げる。

若い男「お父さん！」

次いで大嵩側から、「おおっ！」という声。声の主は村上。

村上「おおっ！義男じゃないか！」

父と子は双方の前方に歩み寄り、手を取り合って膝をつく。

村上「義男、どうしてここに？」

若い男「お父さんを尋ねてここまで来ました……」

親子は涙を流して抱き合う。

突然の出来事に双方暫し黙って見ていたが、

藤野「(他の坑夫に) おい、あいつを引き戻すんだ」

片桐側の坑夫が、若い男を連れ戻そうとする。

恒蔵「待て！」

坑夫、動きを止める。

恒蔵「片桐、この若い者はうちの方で預かろう」

片桐「ふざけたことをぬかすな！こいつはわしらの坑夫だ。それにこ

いつにはこれまでの借金がある」

恒蔵「片桐、この男の借金はわしが払う。（岸本の方を向いて）岸本、

渡すんだ！」

岸本、藤野に封筒を手渡す。封筒の中を確認する片桐。

恒蔵「それでな片桐、漁師たちにこれまでの代金を払ってやれ」

片桐「馬鹿野郎！お前に言われる筋合いではない」

恒蔵「それもそうだな。だが、いいのか？お前の言うとおりに魚はいく

らでも手に入るだろうが、しかし採炭夫は簡単には集まらない

ぞ！」

片桐「何だと！」

恒蔵「お前がやっているように坑夫を扱っていると、働き手が誰もいなくなるぞ。わしは、お前がやっていることを出る所へ出て明らかにしてもいいんだぞ」

片桐「（鼻で笑って）警察に訴え出るといふことか、わしは警察など怖くも痒くもない！」

恒蔵「お前のことだ、警察などは屁でもないだろう。わしが言っているのは、お前のやり方を世間様へ大っぴらにするといふことだ。（痩せさらばえた片桐炭坑の坑夫たちを指さし）こんな身体になるのは普通ではあるまい！これが広まったら、お前の所はやっていけなくなるぞ！」

片桐、恒蔵を鬼の形相で見ている。

やがて――。

片桐「(熊谷に) おい、こいつらに払ってやれ」

熊谷「いいんですか?」

片桐「ああ」

熊谷、漁師たちの足下に現金入りの封筒を投げる。

恒蔵「(知花たちに) これでいいだろう。今日はこれで引き揚げろ」

知花「はっ、はい」

恒蔵に頭を下げる知花。肩を支え合って引き揚げて行く漁師たち。

恒蔵たちもトラックに乗り込む。

片桐「(恒蔵を見て) 大嵩、覚えていろ!この礼はいずれ必ずさせても

らうぞ」

トラック、去って行く。

18 大嵩炭坑村・夫婦納屋・中

病床に臥している坑夫の原田富雄。吉元医師が側にいる。富雄に声をかける妻の亜紀。

亜紀「あなた！あなた！」

富雄、息を引き取る。泣き崩れる亜紀。周りの女たちもすすり泣く。

子ども（五歳）が女たちの中にいる。

吉元「薬も効かなかった……。ここの風土に体力がついていかなかった

たのだろう……」

誰にともなく言うと、部屋を出て行く吉元医師。

19 同・夫婦納屋・外

通りを行く吉元医師。向こうから山口（納屋頭）がやって来る。二人、

肩を並べて歩く。

山口「先生、だめでしたか？」

吉元「ああ……。内地とは気候も風土も違うから体力がもたなかった」

山口「そうですね……。しかし、かみさんはこれから一人ではやっていけないな」

吉元「小さい子どももいることだし……」

山口「かみさんは、ここに来た頃は照屋と一緒にだった。照屋が死んだ後、

原田と一緒にさせたのだが……」

吉元「ふむ、そうか。とすると次は三度目となるのか。子どもは誰の子だ？」

山口「子どもは……。確か照屋の子だ」

吉元「とにかく原田が亡くなった今、かみさんと子どもがここで食っ

ていけるようにしないといかん」

山口「そうだな、相手の男を早いうちに探しておくことにしよう」

二人、歩いて行く。

20 同・公会堂・中（夜）

全国炭鉱業者の霊祭日。この日は休業となり、山の守護神祭りが行われる。

映画、芝居などが催され、村を挙げて大いに盛り上がる。

舞台を楽しんでいる坑夫たち。

一人の坑夫が、坑夫たちの間を割って男に近づく。

斎藤「おい、富樫、顔を貸せ」

富樫「何だ！」

斎藤「いいから、顔を貸せ。ここを出ろ！」

公会堂の外に出る二人。外に出る姿を山口が見ている。

21 同・公会堂・外（夜）

斎藤が先に歩き、富樫が続く。人気の無い所まで来て、振り返る斎藤。

斎藤「富樫、原田の女房は俺がもらう。お前は諦めろ！」

富樫「何？諦めろとはどういうことだ！」

斎藤「馬鹿野郎、こういうことだ！」

斎藤、いきなり富樫に殴りかかる。殴り返す富樫。

× × ×

二人の後を追って来た山口、現れる。

山口「止めろ！止めんか！」

二人、動きを止める。呼吸が荒い。顔、腕から血が流れている。

山口「斎藤、富樫、どうしたのだ！」

二人とも返事をしない。

山口「何があつたのだ？」

富樫「……原田の女房のことで……斎藤が」

山口「原田の女房？（思い当たった風）斎藤、そういうことか？」

斎藤「……はい」

山口「原田は亡くなつたばかりで、まだ後釜も考えていなかったが、

お前らは原田の女房と一緒にになりたいというのか？」

二人とも小さく頷く。山口、少し考えてから、

山口「そうか。じゃあ、こうしよう。二人ともついて来い」

山口、二人を連れて夫婦納屋の方へ歩いて行く。

22 同・夫婦納屋・中（夜）

子どもが寝ている側で打ち沈んでいる亜紀。

山口が斎藤、富樫と一緒に入ってくる。

山口「……奥さん、前に少し話してあったが、どうだろうか？この二人の内の一人と一緒にになったらどうか？」

返事をせず、視線を膝下に落とす亜紀。

山口「奥さんだけでは生活も苦しいことだろうと思うのでな。この二人の内……」

山口の話の途中で亜紀は、突然泣き伏してしまふ。絞り出すような亜紀の嗚咽の声。

声をかけることができず、黙って見ている山口、斎藤、富樫。

23 同・夫婦納屋（納屋の裏庭（日替わり））

亜紀が部屋を出て裏庭の方へ歩いて行く。胸にダイナマイトを隠し持っている。木立の中まで来て急にうづくまる。導火線に火が走る音。大爆発。肉片が周りの樹々に飛び散る。

24 大嵩炭坑事務所・中

恒蔵、恒次郎、奥原がいる。机に向かっている事務員たち。蝉の鳴き声に交じってドーンという音。山口、息を切らして入ってくる。

山口「（荒い息）親方！親方！」

恒蔵「何だ、今の爆発は！事故か！」

山口「原田の女房がダイナマイト自殺をしました！」

恒蔵「原田の女房が？」

山口「はい、亭主の富雄が先日マラリアで亡くなりました。それで他

の男と一緒にになるように勧めていましたが……」

恒蔵「原田の女房は承諾していたのか？」

山口「いや、それが……」

恒蔵「ふむ……。女は覚悟の自殺だな。よほど嫌だったのだろう」

山口「……」

事務所内には、恒市郎やその他の者も来ている。

恒蔵「子どもはいたのか？」

山口「五歳の男の子が……」

恒蔵「(恒市郎を見て) 恒市郎、子どもの面倒をしっかり見てやれ」

恒市郎「はい」

恒蔵「かわいそうなことをした……」

言いながら恒蔵、胸を手で押さえる。

恒市郎「親方、どうしました！」

恒蔵「……ああ、少し気分が悪い。わしは部屋に戻る。恒市郎、恒次郎、

後は頼むぞ」

恒次郎「大丈夫ですか、親方」

恒市郎「今日はもう休んでください」

恒蔵「(顔色が悪い) ああ……」

自宅に戻る恒蔵。

25 大嵩恒蔵邸宅・座敷(夜)

臨終間際の恒蔵。吉元医師が診ている。周りで見守っているすゑ、

恒市郎、恒次郎、美千代。

恒蔵「(消え消えに) ……恒市郎……恒次郎」

恒市郎・恒次郎「はい、ここにおります！」

恒蔵「……わしの夢……わしの夢を……お前たちで……」

恒市郎「お父さん！分かっております！」

恒次郎「お父さん！」

すゑ「あなた！」

美千代「お父さん！」

恒蔵、息を引き取る。

26 同・玄関／廊下／座敷

通夜の三日後。那覇から恒蔵の弟恒勝がやって来る。

恒市郎「あつ、叔父さん」

恒勝「…突然のことだったな」

恒市郎「はい……」

恒勝「義姉さんは？」

恒市郎「奥の部屋です」

恒勝「そうか……」

恒勝、奥座敷に向かう。すゑや恒次郎と対面。

27 同・座敷（夜）

初七日の法事が終わった夜。すゑ、恒市郎、恒次郎、美千代、美千代の夫、恒勝が揃っている。

恒市郎「みなさん、どうもありがとうございます。無事初七日の法事まで済ますことができました。恒勝叔父さん、ありがとうございます
ございました」

恒勝「いやいや、わしは当然だよ」

すゑ「(恒勝を見て) ありがとうございます (頭を下げる)」

恒勝「ところで、今後の炭鉱経営のことだが……」

恒勝が話を切り出す。

恒市郎「そのことですが……。母さん、どのようにしましょうか？」

すゑ「……恒市郎、恒次郎のいいようにやっておくれ」

すゑ、恒市郎と恒次郎の方を見る。

恒次郎、視線を虚空に向けていたが、

恒次郎「母さん、叔父さん、恒市郎兄さん」

恒市郎「ふむ」

恒次郎「わたしにも経営の一端を任せてください」

全員、恒次郎に注目する。

恒次郎「わたしはこれまでお父さんの側で、また恒市郎兄さんにもついで、いろいろと学んできました。お父さんの後を継いでわたしもやります」

恒勝「そうだな。これまで学んできたのはそのためだ」

恒次郎「恒市郎兄さん、わたしに五、六、七坑の採炭を任せてください。

この三坑は、わたしが採炭、選炭の全責任を持ちたいと思います。いいでしょう、恒市郎兄さん」

恒市郎「……ふむ…親父も俺たちに後は頼むと言っていたし、それでいいと思うが」

恒次郎「わたしは五、六、七坑の世話をしますが、もちろん全体の船積み、また輸送先などに関しては、恒市郎兄さんと恒勝叔父さんが、これまでどおりやっていくということです」

恒勝「大嵩炭坑全体の責任者は恒市郎で、恒市郎が送ってきたものを
那覇事務所のわしが受け取って、買い取り先へ輸送するという流
れになるわけだ」

恒次郎「そうです。わたしは五、六、七坑の現場での責任者ということ
になります」

恒市郎「ふむ……母さん、いいですか？」

すゑ「（頷きながら）お前たちの考えでやっておくれ」

すゑの一言で話は終わる。

× × ×

恒市郎たちが座っている。しばらくして恒勝が座を離れる。やや間
を置いて恒次郎も座を立つ。恒次郎、トイレから出た恒勝を呼び止め、
別座敷に招き入れる。

恒勝 「どうした、恒次郎？」

恒次郎 「叔父さん、教えてください。叔父さんなら知っているでしょう」

恒勝 「何だ？」

恒次郎 「叔父さん、わたしの本当の父親は誰ですか？大嵩恒蔵はわた

しの本当の父親ですか？わたしの本当の父親は誰ですか？」

恒勝 「何を馬鹿なことを！」

恒次郎 「叔父さん、教えてください！」

恒勝 「お前は、大嵩恒蔵の子だ。馬鹿なことを言うな！どうしてそんな

馬鹿げたことを言うんだ？」

恒次郎 「……以前、那覇に行った時耳にしたのです」

恒勝 「何をだ？」

恒次郎 「わたしと恒市郎兄さんは顔が似ていない。年齢も九歳離れて

いて、わたしは大嵩恒蔵の子ではないと——」

恒勝「くだらぬことを言う奴がいるものだ」

恒次郎「叔父さん……」

恒勝「何だ？」

恒次郎「わたしの本当の父親は叔父さんではないですか？」

恒勝「何？恒次郎、お前は正真正銘大嵩恒蔵の子だ。これは間違いない。

誰が何のためにそんなことを言っているのか知らんが、お前は

大嵩恒蔵の子で、もちろんわしの子ではない！」

恒次郎「……」

恒勝「恒次郎、くだらぬことを考えずに、父親の追い求めたものを、

おまえが引き継ぐんだ！父親が果たせなかつた夢をお前が実現し

ろ！」

恒次郎黙る。疑念は晴れない。

28 同・廊下へ座敷（早朝）

遺影に向かって黙然としている恒市郎。

座敷の前を通りかかる恒勝。恒市郎が座っているのに気づく。

恒勝「…恒市郎」

恒市郎「（わずかに反応する）……」

部屋に入ってくる恒勝。恒市郎の肩に手を置いて、

恒勝「恒市郎、あまり思いつめるな。体を壊してしまうぞ」

恒市郎「……」

何か考え込んでいる恒市郎。

29 祖慶湾沖（夕方）

祖慶部落の知花が漁をしている。一隻の漁船が近づいてくる。ダイナマイトが投げ込まれ、爆破・炎上する知花の船。

30 大嵩炭坑事務所・中

部落の漁師が、恒市郎、恒勝たちと話し込んでいる。

漁師A 「恒市郎親方、片桐という奴は本当に酷い奴です。祖慶の知花

たちは、今は漁に出ることもできません」

恒市郎 「どうしたのだ？」

漁師A 「この間知花が漁をしていたのですが、そこに妙な漁船が近づ

いてきたのです」

恒次郎 「妙な漁船？」

漁師A 「あれは部落の者の船ではないと知花は言っていました」

恒勝 「何があったのだ？」

漁師A 「知花の船にダイナマイトが投げ込まれたのです」

恒次郎 「ダイナマイトが！」

漁師A 「幸い知花はすぐ海に飛び込んで無事だったのですが、船はバラバラに吹き飛んでしまいました。これは片桐の仕業に違いありません。以前、恒蔵親方が知花たちを手助けしたことへの仕返しです」

恒勝 「やられたのは知花だけか？」

漁師A 「他にもいます。みんなダイナマイトでやられています」

岸本が急に入ってくる。

岸本 「恒市郎親方！」

恒市郎「どうした？」

岸本「うちの兄弟坑の和泉炭坑と仲西炭坑が奪われた！」

恒市郎「奪われた？どういうことだ？」

岸本「片桐に取られた！」

恒市郎「片桐に？」

岸本「二人とも博打のカタに自分の所（坑）を取られた！」

恒勝「あそこは元々政府直営のものだったのを、恒蔵兄が採掘権を得てやっていたものだ。うちは長倉の炭坑が大きいので、斤先料（請

負料）を取って和泉と仲西にさせていたのだが……」

岸本「和泉と仲西はいつもはそんなに大負けしなかったのですが、最近は大負けが込んで、とうとう登記証をカタに大勝負を張ったのだ
そうです」

恒勝「それで結局取られてしまったということか……」

恒次郎「片桐の奴！親方、取り返そう！」

恒勝「まあ、待て。それで和泉と仲西はどうした？」

岸本「あの二人は全てを放り捨てて、もう島にはいません」

恒次郎「親方！あそこは元々うちのものだ！片桐にさせる理由はない」

恒市郎「そうは言っても、肝心の登記証は片桐の所にあるんだ今は。」

親父は長年やってきた和泉と仲西を信頼して任せていたのだ。

最近は何先料も滞ってどうも変だとは思っていたのだが……」

恒次郎「片桐の奴、おそろくいかさま博打を打ったに違いない！」

怒りを露わにする恒次郎。

31 片桐炭坑村・独身納屋・中（夜）

坑夫の安里と宮城が、三人の男と酒を飲んでいいる。

宮城「頭、どうぞ飲んでください。俺のおごりですよ」

小頭1「ああ、飲むぞ」

安里「これも食べてください。どうぞ、どうぞ」

小頭2「うむ、うまい！」

宮城「沢山ありますよ、全部食べてください」

小頭3「ああ、お前らも飲め！」

安里「さあ、頭、もつと飲んでください」

三人をぐでんぐでんになるまで飲ませてしまおう安里と宮城。

32 片桐炭坑坑口（早朝）

ツルハシを担いで坑口に現れる安里と宮城。

昨夜の小頭が、入り口で椅子に座っている。舟を漕いでいる小頭。

宮城「頭、これから入ります」

小頭1「あつ、ああ……入れ」

安里「頭、入ります」

小頭1「ああ……入れ」

……しばらくすると、安里と宮城が忍び足で坑口に出てくる。いびきをかいて横になっている小頭。

宮城「しー、音を立てるな」

安里「よく寝ている」

宮城「よし、今だ！」

背後の山に向かって走る二人。切り立った崖が行く手を遮っている。山蔓をつかんで攀じ上って行く安里と宮城。

33 山中く人家の表

二人は山中を四日間さまよい、山の中腹から人家が見える場所にたどり着く。

安里「家だ！」

宮城「行ってみよう」

安里「ああ……待て！ちよつと待て！あれを見ろ！」

人家の入り口から犬を連れた男らが出てくる。

安里「あれは片桐事務所の奴らだ！俺たちを探しに来たのだ」

犬を連れた男が去って行く。男と話をしていた女の姿が見える。

宮城「あいつら、こんな所まで来ているのか……」

安里「どうでしょうか……もう食べる物もないし……」

宮城「俺は、もうこれ以上動けない」

安里「宮城、弱気になるな！何とか助かる方法を考えよう」

宮城「しかし、今の様子だったら、島中片桐事務所の奴らが張っているに違いない」

安里「……」

疲労困憊のあまり、へなへなと座り込んでしまう二人。

宮城「あいつらに捕まったら、またリンチを食らってしまう。俺は、

もう耐えられん……」

安里「（決心して）宮城、あの家の人に頼んでみよう。片桐の奴ら今こ

こに来たばかりだから、もう来ないだろう」

宮城「助けてくれたにしても……その後はどうする？」

安里「宮城、大嵩炭坑に逃げよう」

宮城「大嵩炭坑に？」

安里「そうだ。お前も大嵩親方のことは聞いているだろう。この間亡

くなつたが、あの親方の所は片桐とは大違いだ。俺たちを人間扱
いしてくれる。どうせどこに逃げても片桐の追つ手が延びている

なら、大嵩炭坑に行こう！」

宮城「（しばらく考えて）そうだな……。俺たちが立ち寄りそんな所は、

あいつらがいるだろうな」

安里「大嵩炭坑に行こう、宮城！」

宮城「ああ、そうしよう」

二人、山を下りて行く。

× × ×

人家の入り口に女が出てくる。二人を見て悲鳴を上げる。

安里「驚かせて申し訳ない。自分らは、片桐炭坑から逃げてきた者です。

彼らに見つかったら殺されてしまいます。お願いです、助けてください！」

山中を逃亡してきた二人は、痩せ細った身体で、衣服は破れ、顔は真っ黒、目だけがギラギラ光っている。びっくりしたままその場に立ち竦む女。家の中から男が出てくる。二人を見て、男も驚く。

男「どうしたんだ？」

宮城「ご主人、自分らは片桐炭坑から逃げてきた者です。自分は宮城、連れは安里といいます。命懸けで逃げてきました。見つかったら殺されてしまいます。助けてください！」

男と女は、二人の必死な様子を見て、辺りを見回しながら家の内に入る。

34 人家・中

女、二人におもゆを与える。

宮城・安里「あつ、ありがとうございます」

掻き込むように食べる二人。

男「一週間後にわしの船を垣花島まで出す予定だ。農作物と一緒に乗

せてあげよう」

安里「あつ、ありがとうございます。ですがご主人、自分らは垣花島に行っても、向こうでも片桐事務所の者が張っているので、垣花島ではなく、長倉の大嵩炭坑に行きたいのです。ご主人、何とか長倉まで乗せて行ってもらえませんか？」

男「長倉に？」

宮城「はい、大嵩親方の所にお世話になろうと思います」

懇願する二人。男は長倉行きを承諾する。

35 島の港湾く船上（朝）

一週間後。一隻の小型船が出港の準備をしている。船首、船尾に農作物の入った大量のカマス（むしろ製の袋）。段ボール箱からはみ出た野菜が見える。

片桐事務所の熊谷たちが現れる。

熊谷「おい船頭、ちよつと待て！」

船頭「はい？」

熊谷「この船はどこに行くんだ？」

船頭「武俣島を経由して垣花島まで行きます」

熊谷「そうか、積み荷を調べさせてもらおうぞ」

熊谷、荷物が積まれている船首部分の船縁に立って、鉄の棒でカマスを突き刺す。船尾の荷物にも次々に突き刺す。手応えが無い。

熊谷「よし、行っつていいぞ」

船頭、船を出す。

× × ×

沖に出たところで、カマスの中から安里と宮城が姿を現す。

宮城「危ないところだった」

船頭「いや、まだ安心できない。二人とも隠れていてください」

安里「ご主人、ありがとうございます。宮城、もう少しだ。我慢しろ」

二人は大嵩炭坑まで逃げ延びる。

36 祖慶部落のとある一軒家・外（夜）

家の周囲を数人の男たちが見張りをしている。

37 同・中（夜）

賭場が開かれている。賭場の中央に恒次郎。相手をしているのは片桐事務所の藤野。側に熊谷が座っている。周囲に他の坑夫や部落の男もいる。

藤野「恒次郎、本当にいいんだな」

恒次郎「お前の方こそ大丈夫だろうな。和泉と仲西の所の登記証を持ってきたんだろうな」

藤野「もちろん、このとおりだ！（登記証を見せる）片桐親方も承知の上だ。お前の方も見せろ！」

恒次郎「（二枚の登記証を出して）よく見ろ！」

藤野 「よし、三番勝負だ。お前が勝ったら和泉と仲西の所は、お前が
いいようにしろ。だが俺が勝ったら、お前の所の六坑、七坑は片
桐事務所が採炭する。いいんだな！」

恒次郎 「おう！」

藤野 「(つぼ振りを見て) 朝敏、やれ！」

恒次郎 「待て！つぼを振るのはそいつではない」

藤野 「何？」

恒次郎 「和泉と仲西もそいつのいかさまでやられたんだらう」

藤野 「何だと！」

周囲の熊谷たちも気色ばむ。

恒次郎 「お前が用意したつぼ振りではだめだ。かと言って、俺が用意
した者ではお前も納得しないだらう」

熊谷たち、さらにいきり立つ。

恒次郎、周囲を見回して、

恒次郎「おい、お前、部落の者だろう。お前ならつぼぐらい振れるだろう」
声をかけられた男は慌てふためく。

男「えっ、おっ、俺ですか？」

恒次郎「そうだ、お前だ。お前につぼを振ってもらおう。藤野、これ
でお互いに小細工のしようがない。いいな！」

藤野「うむむ……」

恒次郎「どうした、藤野？この男では何か都合が悪い理由でもあるの
か？」

藤野「——むむ……恒次郎、分かった！俺も男だ！」

藤野と恒次郎の三番勝負が始まる。

賽子の出目を確認させた後、男が最初のつぼを振る。

男「入ります！」

賽子をつぼに入れ、盆ゴザの上に伏せる。

藤野「恒次郎、張れ！」

恒次郎「丁！」

藤野「半！」

男がつぼを開ける。

男「シ、ニの丁！」

藤野、熊谷の顔色が変わる。男が二回目のつぼを振る。

男「入ります！」

藤野と恒次郎、男の手元を見る。カラコロと賽子の音。男がつぼを伏せ、手前に引く。

恒次郎「藤野、張れ！」

藤野「半！」

恒次郎「丁！」

男がつぼを開ける。

男「サブ、ロクの半！」

恒次郎の険しい顔。

男「最後です。よろしいですか？」

藤野、恒次郎、目を合わす。

藤野・恒次郎「おう、いいとも！」

男「入ります。勝負！」

左手の指股に挟まれた二つの賽子が、右手のつぼに入る。振り上げた右手から、一瞬、賽子の音が消える。男、つぼを伏せる。

恒次郎「半！」

藤野「丁！」

男がつぼを開ける。

男「ピンゾロの丁！」

周りから押し殺したようななどよめき。賽子を凝視したまま動かぬ恒次郎。

38 大嵩炭坑事務所・中

部落の男が血相を変えて飛び込んでくる。

部落の男「親方！恒市郎親方！」

恒市郎「どうした！」

部落の男「大変だ、親方！片桐炭坑の連中が乗り込んできます！」

恒市郎「何、片桐が！」

部落の男「トラック五台がこっちに向かっています！」

恒市郎「奴ら、何が狙いだ？」

奥原「親方！安里と宮城を取り返そうという腹です」

恒次郎「親方！みんなを集めよう！片桐の思うようにはさせない」

恒市郎「おう、みんな用意しろ！」

恒次郎、奥原、事務所を飛び出して行く。

39 大嵩炭坑事務所・外

大嵩炭坑の男たちが、棍棒、木刀、角材などを手に集まっている。

土煙とともにトラックが到着。片桐炭坑の男たちが次々に降り、

恒市郎たちと対峙。

片桐「おい、大嵩！安里と宮城を返してもらおう。二人がお前の所に

いるのは分かっているんだ」

恒市郎「あの二人は、本人が戻らないと言っているのだから諦める！」

片桐「何！（藤野の方を向いて）藤野、登記証を見せてやれ」

藤野「大嵩！これを見ろ！お前の所の六坑、七坑の登記証だ。がたが

た言わずに安里と宮城をこっちへ寄せ！」

恒市郎「（登記証を見て驚き）どうしてうちの登記証をお前が？（恒次

郎に）恒次郎、まさか、お前！」

恒次郎「兄貴、すまない。和泉と仲西の所を取り返そうとして——」

片桐「問答無用だ！野郎ども、大義はこっちにあるんだ。あいつらをぶっ

殺せ！」

雄叫びを上げて激突する両集団。男たちの大乱闘。

× × ×

乱闘の最中、片桐側の坑夫に背後から襲われそうになる恒次郎。

恒市郎「危ない！恒次郎！」

恒次郎を庇って、後頭部に一撃を受ける恒市郎。

恒次郎「あつ、兄貴！」

同時に、片桐が恒市郎の名を呼んで駆け寄る。

片桐「恒市郎！」

片桐より一歩早く、恒勝が恒市郎を襲った男を撃退する。

片桐「野郎ども、止める！止めるんだ！」

大嵩側、片桐側、双方とも引く。

恒勝「片桐、久しぶりだな」

片桐「お前は……大嵩恒勝……」

怪訝な顔で片桐と恒勝を見る恒次郎。

恒次郎「叔父さん！これはどういうことだ？」

片桐、恒市郎、恒勝、三者三様複雑な表情を見せる。

恒勝「恒次郎……恒市郎の父親は片桐純吉だ」

恒次郎「えっ！」

恒勝「三十四年前、政府直営の二つの鉱区を引き継いだのは、大嵩恒

蔵と片桐純吉だった。わしもあの頃は恒蔵兄と一緒にこの踊離ヶ

島にいたのだ。あの時、片桐の奥さんは子どもを身ごもっていたが、

子どもが生まれると奥さんはまもなく死んでしまった。片桐は女

房に死なれ子どもを育てていくことができず、恒蔵兄にその生ま

れた子を譲ったのだ。それが恒市郎だ」

40 回想・若き日の片桐純吉

女（片桐の妻）が横たわっている。片桐が妻の名を呼ぶが、反応が無い。生まれたばかりの子どももの泣き声。子どもを抱き上げる片桐。涙が一筋こぼれ落ちる。

41 回想・若き日の片桐純吉と大嵩恒蔵

恒蔵とすゑ、そして子どもを抱いた片桐がいる。片桐が恒蔵に子どもを託す。

42 大嵩炭坑事務所・外

片桐純吉と大嵩恒蔵の意外な過去が詳らかにされ、誰も声を発する者がいない。

片桐「そのとおりだ、恒市郎はわしの子だ。恒市郎、よく聞け！わし

の所に来い！琉球人の所はもう沢山だ！」

恒次郎「(恒市郎を見て) 兄貴！」

恒市郎、頭の傷を手で押さえながら、ゆつくりと立ち上がり、

恒市郎「俺は大嵩恒市郎だ」

片桐「何？」

恒市郎「俺は、お前が馬鹿にしている琉球人の大嵩恒市郎だ！俺は亡くなった大嵩恒蔵の夢を実現するんだ。琉球人も日本人も台湾人もない。死んだ親父の理想をこの場所で、ここにいるみんなと実現するんだ！」

恒次郎「兄貴！」

この時、歌が聞こえてくる。一人また一人と『美田良浜夜曲』を歌

う大嵩炭坑側の坑夫たち。

『Cの字の形の 美田良浜

アラバラ川と くちづけて

ススキが原の 細道を

君待つ宵の わびしさよ』

大嵩側の坑夫たちの歌う声が、だんだん大きくなっていく。呼応するようには片桐炭坑の坑夫たちの中から、大嵩炭坑側に移って行く者が出てくる。

恒市郎「(大嵩側に移ってきた男を見て) おっ、お前は平良!」

平良「恒市郎親方、俺も親方の所でやらせてくれ! こいつらも一緒に」
気がつくとも二十余名の男たちが、片桐側から大嵩側に移動している。

『美田良浜夜曲』がさらに大きくなる。

『白浜祖内 漕ぎ渡る』

小舟の影の 二人づれ

夜露にぬれて 浜づたい

ささやきかわす 誰じゃやら』

片桐、情況を見ていたが、藤野に合図をして引き揚げようとする。

片桐「(恒市郎を見て) 恒市郎、いい親父さんを持ったな……」

恒市郎、片桐と視線を交わす。

恒市郎「……」

二人の眸の奥に互いの姿が映る。

片桐「野郎ども、引き揚げるぞ！」

トラックに乗り込む片桐炭坑の男たち。トラック、遠ざかって行く。

トラックが去った後に、恒次郎が二枚の紙を見つけて手にする。

恒次郎「これは……。六坑、七坑の登記証……」

登記証を手に立ち尽くす恒次郎。

『赤崎岸に 寄り添いて

恋の殿様 カマドマ待ち

逢いに来たれし マクラ岩

昔を語る 声がする』

『美田良浜夜曲』の歌声が続く。

終わり

※ 『美田良浜夜曲』は、沖縄県の西表島に伝わる作者不詳の歌である。